

都市を流れる川

その考え方

石井ちず子

今、都市のなかの川のあり方について、種々の立場から、多くの論評がなされている時である。その論評の多くは、利水、治水、という、これまでの一面的な河川の見方に対する反省であり、人間の精神生活における『川』の存在の重要性について論じている。

水質汚濁が深刻化する以前において、河川の機能としては、飲料水源、農業・工業用水源および運輸・交通手段等として考えられ、その機能の維持や、洪水・氾濫を防止する策としての治水が、河川を考える主要な問題であった。人口が集中し、工業地域である現在の横浜のような都市を流れる川は、飲料水源としても、他の用水源としても適さず、主に雨水、汚水の排水路として機能する治水だけを考えればよい川なのであるか。

都市への人口が集中し、その結果、都市周辺の緑地が減少し、都市生活者の自然との接触が日常的なものでなくなり、また、都市空間も高密度の利用が進んでいる現在、人間の精神生活にやすらぎを

与える屋外の空間として、また、身近な自然として、都市のなかを流れる川の価値を見直す必要がある。

現在都市のなかを流れる川を考えるにあたり、市民の持つ川のイメージをアンケートにより調査した結果を次に示す。

一——市民のなかの川

川を構成する要素を、川の水路部分だけではなく水辺の空間を含め、市民のなかの川のイメージを、昭和五十三年度実施の『都市河川についての意識調査』を中心として考えてみる。対象は大岡川流域の二十歳以上の男女九百人である。

① 市民が見た川

図1に示すように、現状の川からのイメージは「ドブ川」という人が五八パーセントを占め、次いで「ゴミ捨て場」（八パーセント）、「雨水の排水」（七パーセント）、「子供に危険」（六パーセント）となっている。「子供の遊び場」や

「残された自然」をあげた人は合わせて五パーセントほどであり、市内河川の現状は危機に瀕しているといえようか。流域別では顕著な差はうかがえないが、下流域で「子供に危険」（一〇パーセント）がやや高くなっている。性別などの回答の属性別にみると、「ドブ川」のイメージにおいては、性別では男性、年代では二十代、出生地では横浜以外で生まれた人がやや高率であった。「ドブ川」、子供に危険」、「水害」、「ゴミ捨て場」、

「コンクリート護岸」という人を合わせると、約八〇パーセントの人が、現状の川にマイナスのイメージを持っている。

② 将来の川

図2に示すように、「川をそのまま残して水遊びができ、さかななどがすめるように努力する」という水辺志向が、六六パーセントとなっている。図3の川遊びの場所と比べると、「子供の川遊びの場所をふやす」（四八パーセント）よ

り一八パーセント高い。「フタをして自動車道路をつくる」は低く、四パーセントにすぎない。

都市が川というオープンスペースをどのように位置づけ、利用していくかというところで意見の分かれるところであるが、ここでは、自然としての川を求め潜在的な意識の強さがうかがえる。

流域別では、上流域で「川をそのまま残して、水遊びができ、さかななどがすめるように努力する」が最も高く、七パーセントである。性別では男性に、出生地別では横浜以外の人に、また子供の有無では子供のある人に、やや水辺志向の比率が高くなっている。

③ 川遊びの場所

年々、子供の川遊びのできるところが少なくなっているが、結果は図3に示すとおりである。「できるところを残し、ふやす」が約半数で最も多く、「やむを得ない」（四一パーセント）、「いやらない」（六パーセント）を上回っている。

「川にはさかながすみ(五四パーセント)、ヘドロやゴミがなく(四九パーセント)、自然の川原がある(四六パーセント)こと。そして川沿いに歩道があり(六九パーセント)、水際まで歩いていけるような(五六パーセント)そういう川が望ましい」。

④ 調査地域の特徴

調査地域は図15に示す斜線部分である。上流域として選んだ地域は、まだ田園の雰囲気が残るところもあり、寺・神社の緑が残されている。円海山が近い。中流域として選んだ地域は、弘明寺が近く、商店も近い住宅地が中心である。下流域として選んだ地域は、大岡川と中村川に分かれるつり鐘形のちょうど元のあたりで、埋められたり、フタをされたたりした川がそばにある地域である。中・下流域とも、下水道の普及率は、ほぼ一〇〇パーセントの地域である。

アンケートの結果からみると、全体として、市民生活と離れ、ドブ川とイメーじされている川ではあるが、アンケート質問内容のうち全体で五七パーセントの人が川への愛着を持ち、九一パーセントの人が、川のニュースに関心があると回答していることから、川は見捨てられていないことがうかがえる。そして都市の貴重な自然として川をとらえ、水辺の空

間を強く求めているといえよう。アンケートは大人を対象としたものであるが、結果をみると、川を子供の遊び場としてとらえているという面がみられる。このことは子供の頃の思い出のなかにある川で遊んだことと重なり、水辺への潜在的な意識があったこととは無関係ではあるまい。

二 子供から見た川

次に、現在の子供は川についてどう考えているのであろうか。

「ぼく、四年生の理科で、川の勉強があったけど、ほんとうの川がぜんぜん見られないから、きれいな自然のままの川があるといいな」。

これは、昭和五十三年に行った「横浜の川——いま、川のはたらきを問う」のパネル展会場で行ったアンケートの中にあつた意見である。横浜で育っている子供たちは、コンクリート壁で囲まれた川を見て暮らし、大人に川で遊ぶことは危険であると教えられてきた。

そう言っている多くの大人は、川で遊んだ経験があり(『都市河川についての意識調査』では六三パーセントの人が「よく遊んだ」と答えている)、その楽しかったことはそのだれもが体験してきたことであらう。しかし、今遊び盛りの

年代の、前の意見を書いてくれた小学生は、理科の時間に教科書で知識として知った川を、知りたいと思いつながら、臭く、汚ないもの、危険な場所としてとらえているのではあるまいか。この子供たちが大人になる過程、あるいはなつたとき、今の私たちが川を通じて、自然にふれながら培われてきた人間性、文化などというものを、果たして創り、持てるものなのだろうか。子供のなかのイメージについては、本年度、小学生を対象にアンケート調査を行っている。また理科教育、社会科教育の教材として川を扱って、現在の子供たちの川に対する意識を深めている例もある。

神奈川県神奈川郡の神橋小学校の五十年、五十二年の五年生が行った「瀧の川調査記録」は、熱心な先生のおかげでガリ版刷りのB5版で二七頁の冊子ができている。瀧の川が準用河川であることに始まり、橋のこと、川に対する市民活動のこと、市から聞いた話し、流域の歴史のこと等々。また、今後に残された課題として先生の指導の方向性までがよくまとまっている。川からの広がりやうまく教育の現場に生かしている例として、ぜひ紹介したい内容であり、現在の河川の状況のなかで、次代の大人たちへのわれわれの継承として実施しなければならぬことなのであらう。

現在、河川に対する具体的な操作として、川の改修が多くの地域で実施されている。この改修方法についても、まず考え方を修正する必要があるのではなからうか。

三 川の改修

アンケートの結果、改修についても自然を取り入れた改修を望む意見が強く、現状の画一的なコンクリート護岸と、暗渠にするなどして河川と市民生活を切り離して排水路としてきたことへの反省が、求められているように思える。(河川を上流へと歩くと、最上流部に近い、まだ人家もない場所からすでに川底までもコンクリートになっている箇所があり、治水土本当に必要なものかと考えさせられる)。

安芸駿一氏は、その川の個性にあつた方法で治水の目的を果たさねばならないことを主張している。河相ということばで使っているもので、人間でいうなら、おかたち、性格等というようなものである。川では、例えば、同じ水位でも、河床の条件によって流量が違ったり、その流れはまた、川の規模によって異なりすること、川ひとつひとつが場所により、それぞれの個性を持っているというものである。市内河川もそう考えてい

くと決して同じものではなく、改修の方法も、それぞれに考えられなければならないであろう。

また、『横浜の川と海の生物』（公害対策局一九七八年四月）に、護岸の構造の違いによる魚の分布の検討結果から、次のことが明らかになっている。まず、護岸構造を大別し、自然護岸及び高水敷、そしてもうひとつは二面（兩岸）及び三面（兩岸と川底）コンクリート護岸の二つに分類した場合、前者の方が、種類、個体数とも多い傾向があること。また、二面コンクリート護岸で魚類が確認できたのは、ゴミのたまり場や、土砂のたまった場所に限られていたことが報告されている。

また、淀川を例にとると、河川改修前後で、植生、鳥類、魚類等河川敷における生態系が変化したことが報告されている。そして、改修前の淀川に特徴的にみられたものが、その特徴を失っていったことが挙げられている。

都市のなかの残された自然としての川を保全する必要がある。（また、水田のあぜを保護するという事で田に水を引く小さな溝までコンクリートになった谷戸の水田付近は、それをする以前には、ホタルがすばらしい舞いを見せていたものが、すっかり消滅してしまっただけ（う）。

これら今までに行われてきた改修の大前提は、治水ということであり、今後また変わりはしないであろう。しかし、市民の望む、できるだけ自然を取り入れて改修する方法によって治水の目的を果たすことができれば、現在の、都市のなかに残された貴重な自然にふれながら暮らすことができよう。今こそ、川と人のかかわりを持たすことが、計量できない、表現しにくいところの川の価値の再認識という意味において、重要になってきていると思われる。

四——まだ自然は残っている

水質課では昭和四十九年から、河川の徒步調査を実施している。川沿いに歩きながら川に流入する汚水を観察し、その元をたどり工場が原因であれば立入調査を行い、水質汚濁対策の指導を行うことが主な目的であった。川沿いに歩くことで、湧水箇所や、規模は小さいながらも、自然度の高い環境が多く残っている地域もあることが明らかになってきた。大岡川の上流、円海山に連なる磯子区氷取沢地域や、金沢区の白山道奥（宮川上流）、緑区の寺家町市境あたりなどである。これらの一部にはホタルが生息しているところもあり、地元の人々は毎年楽しみにしている。しかし、多くのそのよう

な地域は、宅地開発等により、年々減少していることも、経年的な調査により明らかにされている。

五——川に関する行政と市民のかかわり

川について考える場合、水の流れている部分だけを見るのではなく、川を囲む空間、さらに拡大し水系全体をみなければならぬ。川を中心に、その管理、監督、責任（権限）から関連部局を明示すると図-6のようになる。また表-1に市長部局内の河川に関する業務を簡潔に示した。これらにはいわゆるタテの関係ははいっていない。

河川行政は、行政側だけの問題ではない。そこには必ず市民の存在がある。市民には良好な環境を享受する権利がある。この権利は行政の中で現象別に分けられ、行政分担当が行われたなかからでは、つかみきれない総合的なものである。しかしながら、市民が、それぞれの生活のなかから、種々の行政が行うことに対して考え、判断できるようにになっていくことが望ましいと考えている。このことが本来の市民参加であり、そのために行政は市民に対して適切に情報を提供していかなければならない義務がある。

今後の都市河川のあり方を考えるとき、市民の間でも、また市民と行政も、そして行政の内部相互も広範な連携・協力が必要とされることは明らかである。東京都の江戸川区等における都市小川の親水公園化にみられるように、行政と地域住民の「やる気」さえあれば、可能な範囲で人間のやすらぎ空間として川存在・利用効果を広げることが可能であると思われる。

横浜市においても、水質について公害対策の立場から、横浜市水質環境目標として、「魚がすみ、釣りや水遊びの楽しめる海や川を市民の手にとりもどせること」を掲げ、実施可能な範囲内で、手段の検討・調査・指導がなされている。また、港北ニュータウンにおける「せせらぎ公園」のように、水辺を配した公園が作られるなど、種々の立場からの都市河川のあり方、水辺のあり方についての検討がなされている。河川管理者からも、基本的には川の管理という立場から抜けたいないが、川とその周辺緑地部分の都市環境のなかにおける存在・利用効果についての見直しがされている。

六——結論

昭和三十年代の高度経済成長期を境とする都市化の進行は、市民生活の中か

図-6 川とその関連局

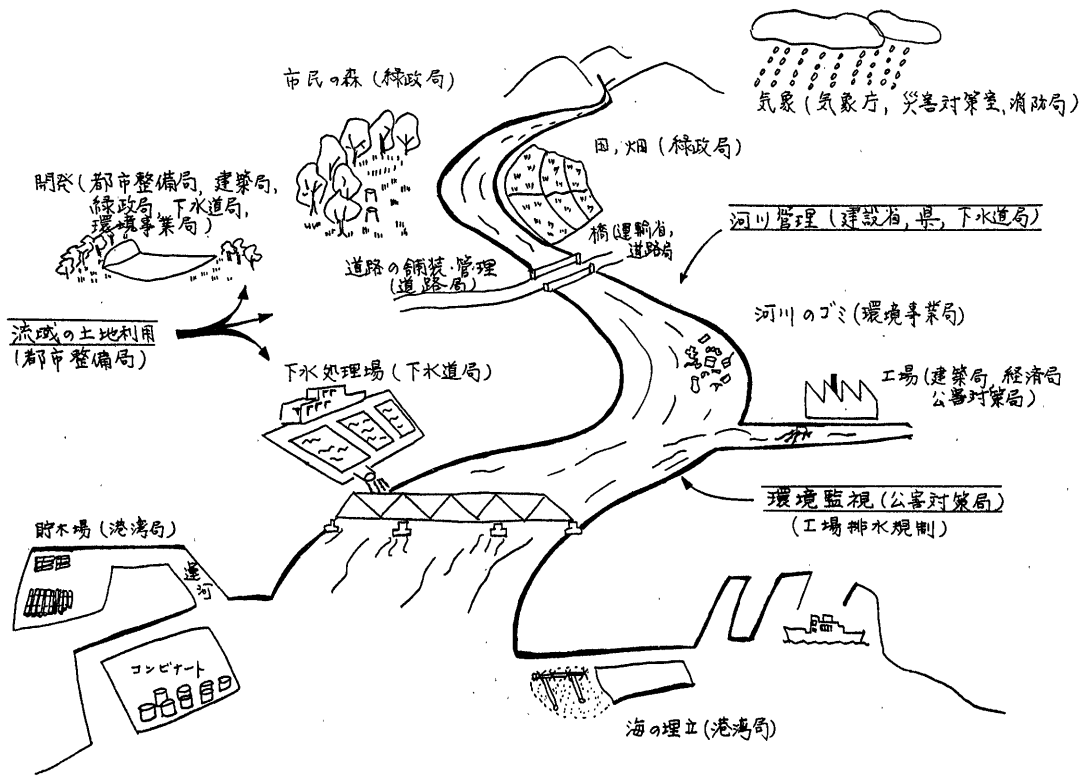


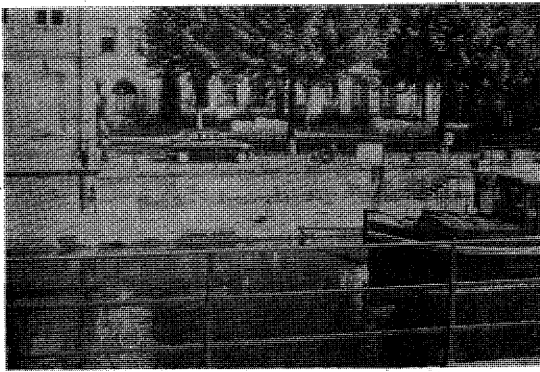
表-1 河川とその関連局

下水道局	
河川部	
河川管理課	河川の占用, 一般下水道, 開発行為に伴う流末河川等についての管理
河川工事課	河川事業の計画, 工事の設計, 災害復旧など
河川工事事務所	大岡川分水路, 港北ニュータウン関係
建設部	下水道事業関係の計画等
管理部	水洗化普及, 下水道管きょや処理場の維持管理, 開発に伴う排水施設の審査
公害対策局	
水質課	河川・海域の環境監視, 流域工場等の排水の規制, 指導, 地盤沈下量と地下水位の関係
指導課	流域工場等の指導
公害研究所	都市の環境条件設定についての研究等
緑政局	
公園緑地部	緑地の調査, 保全区域について, 都市公園, 緑化事業
農政部	農業, 水産業関係
都市整備局	
計画部	土地利用, 都市計画, 開発行為指導
事業指導部	開発・再開の計画指導
環境事務局	
事業部	河川の清掃事業の計画と実施 (一部)
施設部浄化設備課	し尿浄化槽
道路局	
橋りょう課	橋
企画調整局	
	土地利用の基本計画, 人口抑制の規制・指導, 広域的土地利用計画・調査, 都市づくりの基本的構想・都市デザインの企画・調整
総務局災害対策室 消防局警備部消防署 港湾局 その他	

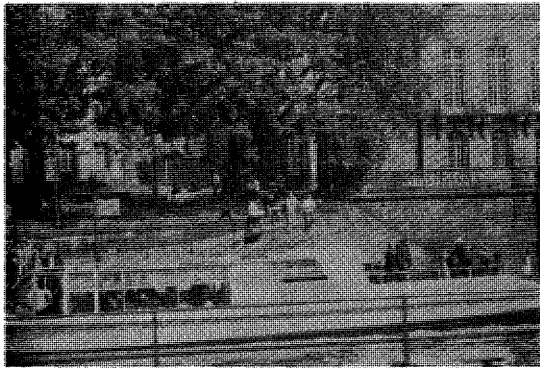
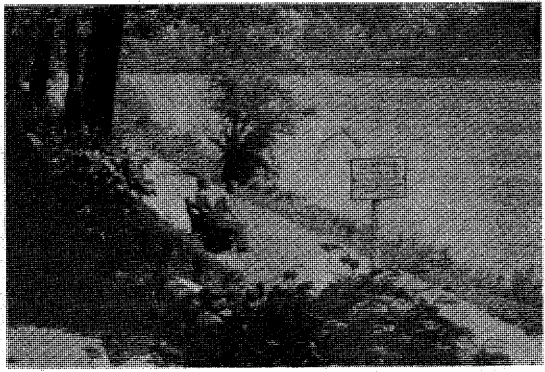
注) 横浜市組織図から, 河川に関連する仕事内容のある, 主な各局を一覧表に作成した。また, 公害対策局については具体的に示した。

ら自然を減らし、また、都市のなかでの自然との接点の川も、人間の生活を反映して変化していった。そして大人には郷愁を残しながら、ドブ川⇨排水路となつてしまったように思える。ドブ川であるがために、現在までの横浜にあるような中小都市河川は、下水・雨水の排水路とみなされ、フタをされ、公園や自動車道路とされてきている。現在、市民は、それを見ながら、また、各々の生活経験のなかから、自然環境としての川を求め、人間、あるいは都市と川との切つて

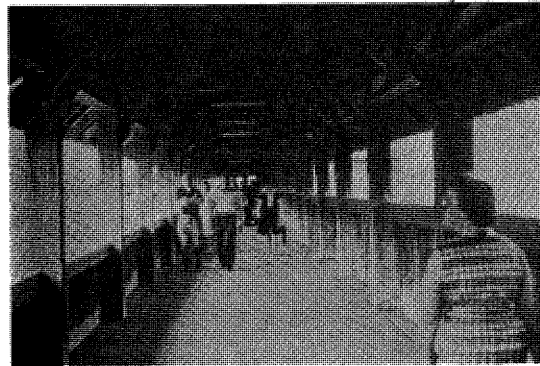
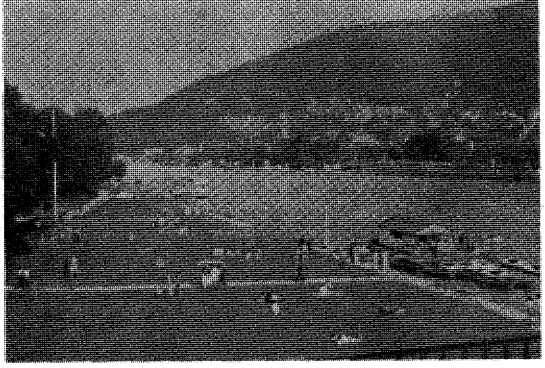
も切れない関係を前提とし、人間、都市、河川の共存する方法を探し出そうとしているようにも思える。これからの河川に対する施策は、川の機能を限定的に捉えず、その川のそれぞれの個性、またそれが作られてきた過程、歴史性まで考慮し、都市と人間と河川の間を立体的に検討していく必要がある。それには、横浜市として市内河川(池も水辺として含めて考える)の現在進行している下水路とみなして整備がされている箇所、あるいはすでに終了しているところ



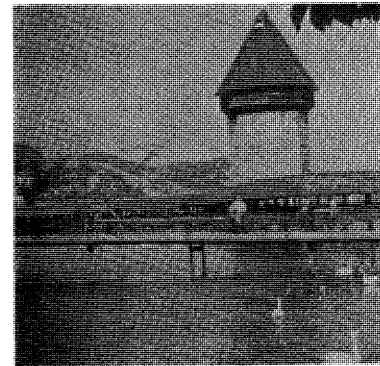
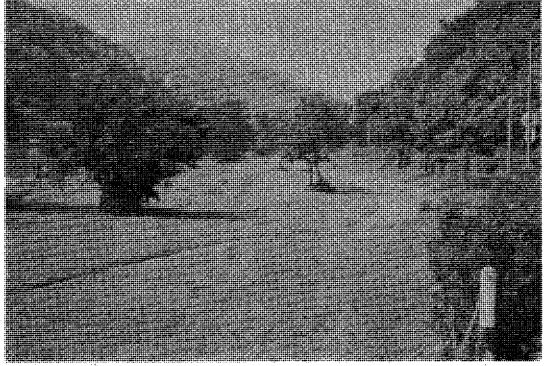
①
▽△
⑤



②
▽△
⑥



③
▽△
⑦



⑧
▽△

ヨーロッパで見た川

④
▽△

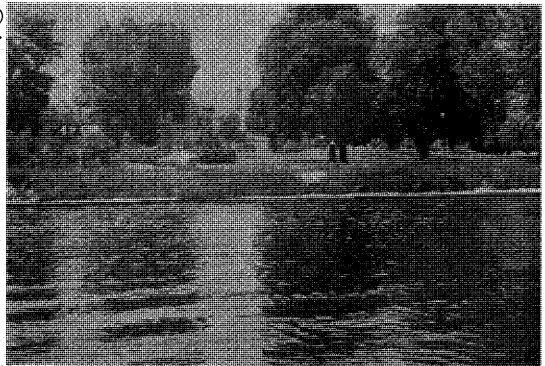


写真 ①②③—ハイデルベルク（西ドイツ）の街を流れるネッカー川、4～5年に一度という川の氾濫があった後で、樹木にその跡があった。④—ライン川本川につながる運河から河岸を見たところ。ストラスブール（フランス）で。⑤⑥—同じくストラスブールの街のなかを流れる川。ちょうど大岡川くらいの幅。観光船が走り、河岸では写生する人がある。⑦⑧—ルツェルン（スイス）。ロイス川にかかる屋根がある木橋、カペル橋。⑦はその橋のなか。

もで含めまた、川としての見直しをすること、現状における市民が親しめる憩いの場となり得る可能性のある箇所や地域を選び出していく作業を、市民の協力によってすすめていくことではなからうか。

七——追記・ヨーロッパで

見た川から

ヨーロッパの川沿いを歩いた時に「温か味」を感じた。この「温か味」とは何だったのだろうか。ひとつには、水際に人がいたこと、またその要素があったことだと思われる。写真のいくつかにもあるように、川辺に人が集まれる場所があること、そして川沿いの木陰にはベンチが川の方を向いて置かれている。必ずしもそれが観光地だからというわけではな

く、通りすがりの小さな街に流れる川沿いにも、そして、源流近くの水源林のある緑豊かな川辺にも、その場にふさわしい腰掛けが置かれていた。そして、橋の手すりは、フラワーポットがかけられ、川沿いにも、川の中の小さな島にも花があふれていて、行道く人、ベンチで憩う人の目を楽しませていた。

また、「温か味」は、その場所に立った時の全体から感じられるものであり、川沿いの土地利用（街並みか草木生い繁る緑が多いところ等）、川の様子（生物・水の色や流れ、大きさ等）などの調和がとれているとき、あるいは逆に対比した時の相互間の隔たりの大きさ等によるものと思われる。例えば、森の中に緑豊かな公園を作ることと、ビル街にそれを作ることで、公園を作ることの意義が異なってくる。川の場合も同様で、

前にも述べた「都市のなかだからこそ」の価値が生まれてくる。そういう意味で自然と人間との最も身近な接点である川・水辺を、都市のなかに残していく意義は大きい。川と人間と都市との調和のとれた環境が生まれ、川辺を歩くだけで、この街の温か味が感じられるような川を、蘇えらせ、つくり出してゆく必要がある。

八——おわりに

このレポートには、『都市河川についての意識調査』から興味あるいくつかを載せた。詳細は報告書を参照していただきたい。

八月十一日に「川・よこはまに水辺をもとめて——明日の都市環境を考える」のテーマで、第三回公害セミナーが行わ

れたが、その趣旨は、横浜市水質環境目標「魚がすみ釣りや水遊びが楽しめる……」の達成を目指す一環である。横浜市の川の状況を市民の皆さんにお知らせしながら、今後の川のあり方について問題提起という形がとられた。よりよい環境をつくっていくためには、今後ますます市民の協力が必要不可欠となっていくなかで、公害セミナーのように市民が自由に参加できる催しの必要性・意義は大きい。また、今後の都市河川のあり方については、それぞれの専門家や、市の内部のご協力もいただきながら、「横浜市内の河川環境を考える会」を中心に、現在も検討がすすめられているところである。

〈公害対策局水質課〉